

氏名	野 島 直 子 の じま なお こ
学位(専攻分野)	博士 (人間・環境学)
学位記番号	人 博 第 259 号
学位授与の日付	平成 16 年 9 月 24日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
研究科・専攻	人間・環境学研究科人間・環境学専攻
学位論文題目	寺山修司における創作活動と精神分析

論文調査委員 (主査) 教授 新宮 一成 教授 篠原 資明 教授 岡田 温司

論 文 内 容 の 要 旨

寺山修司(1935～1983)は、1954年に18歳で歌人としてデビューし、1960年代から1980年代にかけて、俳句、短歌、演劇、映画、詩、童話、評論などさまざまなジャンルを横断し、現代芸術(文学)や若者文化に多大な影響力を与えた詩人である。とりわけ、60年代末に始まる天井桟敷による前衛演劇の活動は、世界演劇のステージに重要な足跡を残した。

1983年47歳で死去し、死後20年あまり経つが、その活動の世界性と思想的先駆性がジャーナリズムにおいて話題になることはあるものの、本格的な研究はほとんどないのが実情である。様々なジャンルを横断し、全体像がつかみにくいばかりでなく、その活動が「文学からの独立」を標榜し、かつ同時代の風俗を巻き込んで進行したため、文学史や芸術史など、アカデミックな視点からでは研究しづらいことがその原因として挙げられよう。

本論文は、こうした多岐にわたる寺山の創作活動を、主としてラカンの精神分析学との関係において論じることによって、その思想について一つの統一的視座を与えようと試みたものである。芸術作品についての精神分析的アプローチとえば、古典的にはフロイトのレオナルド論に代表されるように、伝記的資料を用いながら、作品から作家の無意識を考察するという研究方法がある。しかし本論文は、そうした方法はとっていない。寺山は、少なくとも1973年以降は確実に構造主義の人類学と精神分析に関する豊富な知識を有しており(それ以前においてもかなり有していたと推測される)、精神分析に関する知を積極的に用いつつ作品の思想性を高めていった形跡があるからである。よって本論文では、第一部をのぞき、基本的には寺山の創作活動と精神分析的知の関係を考察の中心に据えて論じている。

本論文の著者はまず、第一部(第I章～第II章)では、十代の句づくりから歌人としてデビューを果たすまでの初期の創作活動を、ラカンが主体形成の基礎にすえた父性隠喩と鏡像段階論を導入することによって、精神分析的に分析した。その結果、これらの作品は後の作品集で削除・改作され、別様の趣をもつことになるが、思春期における主体形成の危機を孕みつつも、父の名が要所で機能し、神経症の主体の形成が刻まれていることが確認された。

次に第二部(第III章～第V章)で著者は、公的デビュー後の寺山の創作活動が、第一部で見た初期作品の多様な反復と見なせるものであり、その際、精神分析でいうところの、神経症、倒錯、精神病といった区分が創作活動の指針として重要な機能を果たしていることを確認した。第III章では短歌形式と神経症を、第IV章では、後期創作活動の中心となった演劇活動と倒錯(マゾヒズム)を、そして第V章では、中年期に発表された俳句作品と精神病の関係をそれぞれ取りあげた。こうした創作上の理念の推移は、絶えざる自己分析と父の名への問いのもとに、「家系」に対する「捨て子家系」という問題設定において独自に産み出されたものであり、寺山の思想を形成する重要な要素だと考えた。

最後に第三部では、後期寺山作品の多くに、作品が属するジャンルへの問いが作品自体の中に含まれるという自己言及的な作品構造が見出されることに注目し、そうした作品において精神分析の知が自覚的に活用されていることを見出した。

まず第VI章では、「映画論としての映画」である短編映画『蝶服記』(1974年)を取りあげ、続く第VII章では、「演劇論としての演劇」である『疫病流行記』(1975～76年)を検討した。後者は、アルトーの「ペストとしての演劇」という演劇理

念の継承を演劇それ自体の中に示したものである。それらの検討の結果、寺山がこれらの作品において、フロイト＝ラカンの心的装置と反復の概念、神経症／精神病の構造論的差異についての知見を有効に用いて、映画、演劇の表象システムを形象化し、20世紀の前衛芸術の重要な問いである「芸術論としての芸術」に彼なりに応答していることを確認した。

このように寺山の創作活動は、精神分析の知と深く結びついており、捨て子家系の若者を率いる教祖的存在である寺山自身の絶えざる自己分析という要素を有している。こうした自己分析を通して、寺山においては「人間」の概念が一步ずつ問い直されながら拡張されていったのである。そしてそれによってこの自己分析は、危険を孕んだ転移集団である演劇集団の安全弁となると同時に、芸術作品としての独自性や完成度を高めることにもなった。戦後社会論（近代空間論）の広がりをもつ作品や、現代芸術の重要な問題意識に応えるような作品、そしてシンギュラーなスペクタクルを作り出すことができたのも、以上見たような精神分析的な概念装置の取り込みとその活用にも負うところが大きい。

寺山は構造主義的人類学やフーコーの権力論など様々な知を摂取して創作活動を続けたが、以上のような意味で、最も重要なのは、構造主義を経験した上で読み込まれた精神分析の知であり、ここに見られる精神分析の知のありようは、精神分析が広範に広まると同時に強い批判にさらされている今日、精神分析という知のもつ思想性について考え直す契機ともなりうるものであらうと考えられる。

論文審査の結果の要旨

本学位申請論文は、寺山修司（1935～1983）の創作活動を、精神分析、とりわけジャック・ラカンの理論を導入して考察した前例の少ない優れた研究である。

寺山修司は、戦後日本の文学、芸術、文化、思想を語る上で重要な存在であると認識されながら、死後20年あまり経つ今も本格的な研究はなされていない。その理由としては、①その創作活動が同時代の風俗や政治状況と深く関わり、現在にもその影響が及んでおり、対象化しづらいものであること、②特定のジャンルで地位を確立しようとせず、むしろジャンルごとの境界を攪乱するように活動したため、従来のジャンル史的な視点によってのみ捉えるには限界があること、③演劇と戯曲を等値する見方を批判している寺山の作品を、残された戯曲によって評価することは適切でないばかりでなく、同時代に評価された特異なスペクタクルは再演が困難なため、関係者の主観を離れて論じにくいということなどが挙げられる。これら三点を、学位申請者は、後述するように見事に克服している。

芸術論に精神分析を用いた従来の用例は、概念構築の深化が伴わず、素朴な当て嵌めの作業に陥っている場合が多い。だが、元来精神分析は、現代美術あるいは前衛芸術と同時代的に発展してきた思想運動であり、欧米の芸術論では、正面から精神分析概念を取り込んだ議論が活発に行われることによって芸術に含まれる思想が言語化され、さらにその成果が再び芸術運動の内部に取り込まれる…といった形での有機的な発展が見られてきた。これに対し日本では、文学論や芸術論の中に、精神分析的なアプローチに対する無理解ゆえの不信や警戒の表明を認めることがいまだ稀ではない。

本論文の独創的な点は、寺山修司の創作活動において、寺山自身の精神分析に関する知が重要な参照枠として機能しているという今までほとんど着目されたことのない事実を、作品に沿って掘り起こし、その着眼点によって、多岐にわたる寺山の創作活動に一貫した見取り図を与え、寺山の思想の展開を浮かび上がらせようとしていることにある。現代では精神分析学を全く知らずに創作活動をなす者はむしろ稀になったとはいえ、本論文は、寺山による精神分析の知の参照が、そうした現代の表現者の一般的な傾向に還元できるものではなく、ヨーロッパの同時代の思潮に学んだ本格的かつ独自のものであり、彼の思想形成の核となっていることを示している。これらの点で、本論文は、芸術論の中に精神分析をきわめて有機的に織り込むことに成功した、日本では類例の少ない労作であると言えよう。

その第一部では、公的デビューにいたるまでの初期作品を、一次資料を参照した上で精神分析的に考察することによって、同時代的な文脈から切り離すことに成功し（前述①）、第二部では、公的デビュー以後の作品群がこうした初期作品の多様な反復・書き替えであるという興味深い事実を取り出し、そこでは作者の精神分析の知が積極的に使用され、自己の生活史の精神分析的再構築になっていることを示している。しかもその再構築の通時的様式は、精神分析の臨床的事実をモデルにして言えば、神経症的→倒錯的→精神病的な構造的特徴を以て推移していることが確認される。そしてこのような自己分析的な作業は、若者の教祖としての存在でもあった彼にとって、精神分析的転移を孕んだ危険な集団の安全弁となると同

時に、一歩ずつ「人間」という概念を拡張することを可能にしたものであり、この作業を経ることでその作品の独創性と完成度が高められたと論じられている（前述②）。

最後に第三部では、諸ジャンルを横断した寺山の創作活動が、ジャンルへの問いを含んだ自己言及的構造を有すること、映画、演劇における表象システムを形象化した精緻な理論的産物であることをフロイト＝ラカンの心的装置を用いて示し、寺山作品の新たな芸術史的位置づけに成功している。同様に、同時代的に評価されつつ消滅したスペクタクル作品についても、ラカン理論の導入により観劇体験の個別性を越えた理論的發展の端緒を開いている（前述③）。

こうした寺山の創作活動は、現時点からみると、ポスト構造主義との親和性が高く見えるし、そうした方向から検討することも可能であるが、本論文は、寺山における「捨て子家系」という独自の問題意識が、構造主義的人类学と精神分析に関する知を独自に参照しつつ産み出されたものとみなし、それにラカンの理論による一貫した説明を与えており、それは翻れば、現代思想におけるラカンの思想的意味を示すことにもなっている。

このように本学位申請論文は、とりわけ自作の書き替えや、作品存立への問いを内包した作品に見られるような寺山作品の自己言及的構造を、精神分析の知のやはり自己言及的な構造特性と結び合わせ、両者の間に内在的関連を見出すことによって、前例のない生産的な精神分析的芸術論として結実している。それは、寺山研究における諸々の技術論的困難を打開してその思想の独自性を浮かび上がらせるのに貢献するのみならず、寺山の創作活動に見出されるような自己をめぐる知の基礎論的なありようにこそ、精神分析、とくにラカンの精神分析の思想的意味があることを強く示唆しており、人間存在をその病理的可能性にまで踏み込んで解明することを目指す人間・環境学専攻人間存在基礎論講座の理念に適ったものとなっている。またその各章のほとんどは、すでに関連の学会誌などで公表され、その一部は学会賞の対象となっている。

よって本論文は、博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成16年7月15日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。